

*ポレーシェとは チェルノブイリ付近の湖沼低地帯をいう



ニホンノミナサマへ !!

世界初の壮大な挑戦「菜の花プロジェクト」、そして、人類の夢について熱く語り合ひましょう!!

ジトール国立農業生態学大学准教授
ニコライ・イリイチ・ディードウフ



私の講演は、ジトール州の農業にチェルノブイリ事故が与えた影響の規模に関するものです。講演に用いるデータは、チェルノブイリ事故が農業にとってきわめて重大な結果をもたらしたことをはっきりと示しています。

汚染地域に住んでいる人たちの多くは、農村で食品を自給している人たちです。農村の住民の被曝線量は、都市住民に比べずっと高くなっています。

多くの耕地の汚染密度はあまりに高いため、そこでの農業生産、またそこで採れた作物の使用は禁止されています。放射線環境は、事故直後に比べれば顕著に改善されており、また除染の措置が成果をあげているにもかかわらず、現在に至るまで、農村地域の住民を放射線から守るという課題は解決できていません。

被災した農村地域は、生態系の破壊によって今日大変厳しい状況下にあります。特に憂慮されるのは、農地の除染、被災地の持続可能な発展、現実的な経済復興の問題です。これらすべてに対して新たなアプローチが必要であり、科学的な根拠のある解決策、相当の金銭的支出、そして国際社会からの財政面・科学技術面での協力が求められます。特に、核の惨事を身をもって体験した日本国民の方々の協力は貴重です。

同様の惨事の克服に関して多くの経験と先進的な実績を持ち、また高度な科学技術と経済力を備えた日本社会からは、「菜の花プロジェクト」のように、汚染地域の除染、被災地の持続可能な発展に対する新しいアプローチといった分野で、他に先駆けて貢献をしていただけるものと期待しています。

〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町 137 1-10
 チェルノブイリ救援・中部 代表：小牧 崇
 郵便振替：00880-7-108610
 TEL/FAX：052-836-1073(月・水・金 10:00 ~ 17:00)
 ホームページ：http://www.chernobyl-chubu-jp.org

ディードゥフさん講演会のご案内

4月下旬から始まったバイオガスプラント建設工事は、約1ヶ月後のガス発生を待つのみとなり、またナタネの春蒔きも完了して、「菜の花プロジェクト」の3年目が本格的にスタートしました。

寒冷地ゆえ、苦勞の連続となったプラント建設は「ラスキ通信」奮闘記(前号 p4-7・今号 p6-7 参照)にあるように、日本側派遣団の頑張りのみならず、シトール国立農業生態学大学生による研修実習(お手伝い)が、大きく貢献してくれました。

バイオガス研究の一助にと、学生を選任し送り届けてくださった、当プロジェクトマネージャー役ディードゥフ准教授の来日が間近に迫ってきました。

7月30日から11日間の滞在中、4回の講演会、伊那地方で農業・BDF・BGの視察、京都市で「廃食用油燃料化施設」の視察、ご本人希望で「東京見物」と過密スケジュールです。2年目(08年度)の土壌浄化に関する放射能分析報告書も完成し(現在翻訳中)、今回の講演会では、ご本人から最新の分析結果を報告していただきます(世界初の報告です)。

同時に、プロジェクト当初より今回のBGプラント建設まで、現地撮影を続けてきた宮腰さんの「DVD上映」も合わせて行います。是非一人でも多くの皆様が、ご都合の良い会場でお聞きいただけますよう、ご来場をお待ちしております。

伊那講演会

8月2日(日) 13:30~16:30

「ロッジ吹上」

長野県伊那市西箕輪 905-3

TEL(0265)72-2788

(資料代 500円/人)

京都講演会

8月5日(水) 18:00~20:00

「京都精華大学 黎明館

L-002 教室」

京都市左京区岩倉木野町 137

TEL(075)702-5100

大阪講演会

8月7日(金) 14:00~17:00

「京都大学原子力実験場」

大阪府泉南郡熊取町朝代西二丁目

名古屋講演会

8月8日(土) 13:00~16:30

「なごやボランティアNPOセンター
12F 第1研修室」

名古屋市中区栄一丁目 23-13

伏見ライフプラザ 12F

TEL(052)222-5781

(資料代 500円/人)

☆☆☆ **チェル救のオリジナルキャンディー**ができました。

昔なつかしい金太郎飴! プロの職人技をご覧ください。
デザインは「とどけ鳥」と「菜の花」。

キャンペーングッズとして、

いろいろなイベントで活躍中!!

講演会場で入手可能です! (¥200/10個入) ☆☆☆



総会&チェル救デーの報告

去る6月27日、「ウィルあいち」において「総会&チェル救デー」が開催されました。

総会では、2008年度の事業と決算の報告に加え、逼迫した財政状況の説明があり、みな沈痛な面持ちで聞いていました。

今回は、理事・監事改選の年でしたが、現メンバーは全員再任され、新たに2人（池田さん・神谷さん）の理事就任が承認されました。その後の理事会で、小牧崇さんが代表に再任されました。

チェル救デーでは、まず帰国後間もないパイオガス工場の立役者、宮腰さん制作のラスキ村でのパイオガス工場の映像が上映されました。「こんなに苦労の連続だったんだ」と涙なくしては見られない作品で（泣いていたのは私だけですが…）、ぜひ多くの方に見ていただきたいです。

原さんの話は、当事者とは思えない冷静な分析と、当事者だから言える問題点など、濃密な報告でした。主だったところまで完成させ、その後を現地の竹内さんに委ねてきており、予断を許さない状況ではありますが、原さんのお人柄なのか、ご苦労をまったく感じさせず、宮腰さんの映像がなければ、「ゆる〜い工事だったのかな」と錯覚してしまうほど。

来年の総会で、更に皆さんをうならせる報告が聞けることを楽しみにしています。

（市原）



ラスキ村パイオガス工を終えて（原 富男）

4月21日から6月11日までの間、ナロジチ地区ラスキ村でミニパイオガス装置（以下、BGと略す）の建設工事を行いました。今回の工事は、本格的なBGを作る前の実験的な性格を持つもので、工事に当たっての問題点を探りながら、BGを知らない現地の人へのデモンストレーションをするというものでした。資材・労働・土質・技術など、現地事情を予め知っておけば次の工事に役立ち、現地の人々もBGを身近に感じることができるだろうと考えました。

そのため、規模は小さくとも実際にガスが発生し、生活に使える物を作ることになりました。醗酵槽は8m³で、1日に40kgの牛糞（またはナタネのバイオマス）と40リットルの水を投入し、1日当たり2m³のバイオガス（メタン）を発生させる装置としました。これは、一般家庭の1日のガス使用量とほぼ同じ量になります。

工事には、日本から私と遠藤さん・竹内さんが参加し、現地側からは農業大学の学生と設置場所である農業企業体の労働者が参加してくれました。バイオガスを卒論のテーマにするということで、学生の工事に対する姿勢はとても積極的で、辛い重労働ももろともせず動いてくれました。学生が来られないときは、現地の労働者を頼みましたが、1日約1,000円でよく働いてくれました。現地生活では色々な問題がありました。特に困ったことは寒さです。日本でなら暖房も要らない時期なのに、朝夕はおろか昼間でも寒く、1日に天候が何度も変わり、強風と雨・嵐に泣かされました。寒いので、昼間でも現場では防寒着代わりのフード付の合羽が手放せず、宿舎では夜はペチカを焚きました。また、宿舎には風呂がないため、屋外でドラム缶に湯を沸し体を洗いましたが、屋外ですからすぐ寒くなり大変でした。

工事で一番困ったのは、コンクリート練りと運搬でした。日本でならば生コンを注文すれば配達されるのに、ラスキでは生コン車はありません。コンクリートミキサーに、砂と砂利・セメントを投入して練り、それを一輪車で運ぶわけですが、自分の体が壊れる寸前まで頑張らなくてはならないわけで、これは辛いものでした。二番目は、工事場所が牧草地の中にあり、これまで牛が通過し草を噛んでいた場所だったため、工事が始まって、牛は今まで通り自分の場所を譲らず、毎朝現場に牛の「落し物」が散乱し、この片付けに時間を取られるということもありました。三番目は、ミキサーや電動工具を使っている最中の停電です。停電は、地区全体のものと、企業体敷地内での強風による短絡、企業体の電気代不払いの3つの

原因から起り、いつ回復するか判らず、いらいらしました。四番目は装置の保温でした。ラスキの厳しい冬の寒さの中で装置を動かすには、しっかりした保温工事と加温が必要となります。保温のため、醗酵槽周囲に発泡スチロールを巻き、更に醗酵槽を温める加温装置も設置しました。言うは簡単ですが、この作業が加わるだけで工事の材料も増え、コンクリートは乾燥時間が必要なため、時間や手間がかかるわけです。五番目は湧き水問題です。現地は地下水位が高く湧き水が出たため、急遽、装置全体を1m嵩上げすることにしました。沸き水の中で装置を安定させるため、穴の底に板を張りその上にコンクリートの層を作り、底を固定しました。

このように、さまざまな困難はありましたが、約1ヶ月半で工事を終わらせることができました。現地での生活と工事期間中の経験から、菜の花プロジェクトの課題も見えてきました。

その一つは、現地でのドイツ資本によるナタネ栽培が上手く行っておらず、栽培面積が減少していることと、「菜種は肥料食い」というナタネに対する誤った認識があることです。「ナタネ栽培は金がかかる」とか、「金にならない」という住民の評価や考え方が変わらなくては、プロジェクトの前進はありません。その二は、住民は貧しく、給料遅配・物々交換が当たり前という生活の中で、夢物語のようなプロジェクトに直ぐには飛び込めないという現実があります。その点で、ナタネを栽培すると利益が出るとか、生活が良くなるというようなメリットを具体的に示さなければなりません。そのためには、現地に大学なり我々なりが常駐し、現地事情を把握しながら事業を柔軟に進めなくてはならないと思います。

その三は、工事に関しては単純な材料費はかからないものの、特にミキサー車がないとか、寒さ・停電・水問題などで時間がかかり、日程が延び労賃が高まりました。今後の工事では、今回の経験を生かした十分な準備が必要となります。

今回の装置では、ガスを当面大学の実験目的に使い、更に村議会の建物あるいは消防詰所で使うことになります。この装置を生かすも殺すも、実は誰が運転するかにかかっています。バイオガス装置は、メタン菌の醗酵により成り立っているわけですから、毎日ご飯(原料)を食べさせ、具合(醗酵状態)を観察する人が必要になります。この人は、必ずしも科学に精通した人でなくてもよく、面倒見の良い人であることが一番です。現在、BG装置はほぼ全ての工事を終え、水密試験(水漏れ)に入っています。水密試験が無事終われば、原料を投入し徐々に運転をはじめることになります。

工事現場には、現地の住民が入れ替わり訪れ、見学していました。遠くからも、BG工事を聞きつけて見に来る人もいました。まだ、BGへの本当の理解ではありませんが、中には自分で作ってみたいという人もいて、この装置の見本としての役割は大きいと感じました。

「ボラみ展」に参加しました!! (河田)

7月5日(日)、「ボランティアをしたい人とボランティアを求める団体を結ぶ」をコンセプトとする「ボラみ展 in 愛知淑徳大学CCC」(昨年に引き続き2回目)が行われ、チェル救もブース出展しました。35団体と2企業が参加し、賑やかに行われました。チェル救からは、市原さん・伊藤さん・池田さん・神野(英樹・美知江)さん・山本さん・戸村さん・河田が参加し、菜の花プロジェクトとカードキャンペーンのパネルを展示し、8月に行われる「ディードアップ講演会」のチラシを配布しました。



現在進行中のバイオガス製造装置の製作の様子を示す写真は、ナタネプロジェクトの具体的なイメージを良く現し、とても好評でした。また、参加者にはその場で年末にチェルノブイリの子ども達に送る「クリスマス・カード」を作ってもらい、親子連れや学生の皆さんに「チェルノブイリを忘れない」をアピールしました。合計33通の素敵なカードが次々と作られ、壁や窓を賑やかに飾りました。

こうした参加型のイベントは、参加者と主催者の距離を縮めるよい機会であることを改めて実感しました。事前の準備をしてくださった昨年のNたま研修生の黒瀬さん、ありがとうございました。

2007年4月に初めてウクライナのナロジチにナタネを植えて以来、2年半が経った。5年計画の半分である。20年来の荒地にナタネの黄色い畑が実現して、計画は順調かと思われたが、2008年にはバイオディーゼル油（BDF）生産施設の建設に様々な規制や計画の遅れが目立ち、BDFの試験生産がはじまったのは9月だった。そして2009年、困難を極めたバイオガス装置の建設も、メンバーの必死の努力でようやく山場を越えた。今後は、システム全体の運営と廃棄物対策に取り組む。

● バイオガス装置建設に目途

既に本誌上でも報告されているとおり、ナロジチ地区ラスキ村でバイオガス装置の建設が4月末から行われている。ラスキ入りした原さんはじめ、宮腰さん・遠藤さん・現地駐在の竹内さんらに加え、農業大学の学生・現地作業員の参加を得て、バイオガス装置は7月半ば現在、ほぼ完成した。

当初計画した装置よりは、規模が約4分の1（発酵槽容量8m³）だが、栽培した菜種のバイオマス処理には十分である。

今後、装置の点検を行い、初期発酵用にバイオマスとして牛糞を投入し、早ければ9月にはバイオガスが発生し始める予定である。勿論、楽観は禁物である。バイオガスはメタン菌という生き物が相手である。菌の培養がうまく行かなければ、ガスは発生しない。農業大学の学生等がこの装置を使って、バイオガス発生条件や、ガスの成分分析、放射能の分析などを行う予定である。こうした実験自体が世界に例がなく、新たな挑戦である。努力が実るよう期待したい。

● BDF装置の定常運転

BDF装置を収納している建屋の補修もほぼ終わり、BDF装置の本格運転も始める。春蒔きナタネの種子収量は1ヘクタール（1ha）当たり1.5t、秋蒔きナタネの収量は1ha当たり2.5t、合わせて4t、合計4haであるから、年間収量は16tである。これを処理し、BDFを作る。当面は我々のナタネ畑の耕作や収穫に使うが、余剰分が出れば、町のスクールバスな

どの公的利用にも提供したいと考えている。現在、ラスキ村始めナロジチ地区の住民はナタネ栽培にはあまり関心がないと聞く。それはこれまで「ナタネ栽培は土壌を疲弊させる」と現地では考えられており、また、昨年から近くに進出したドイツ企業出資のナタネ畑の出来が悪いことなどが重なった結果である。農大が管理している我々のナタネ畑の出来は、現地の土壌条件を考慮すれば上出来で、適切な栽培管理をすればナロジチでもナタネの栽培が可能であることがこれまでの研究で明らかになった。今後、ナタネ栽培を住民の間に広げるための努力が必要である。そのために、メンバーを長期派遣し、住民の意見を聞き、ナタネプロジェクトの意義を広報する予定である。

● 次の課題に向けて

ナタネ栽培とBDF生産、そのバイオマスを使ったバイオガス（BG）の生産、というサイクルがどのように上手く回るのか、その答えを得るのはこれからである。各装置の原料と生産物の量的関係がどうか、放射能の流れがどうなるのか…など、農大が中心となってデータを採集し、システム全体の整合性調査が始まる。本来、このシステムは放射能汚染問題がなければ、BG装置から出る廃棄物は、上質の液肥として農業生産を更に豊かにできるはずのものである。が、ナロジチでは放射能対策が最後に必要である。5ヵ年計画はいよいよ佳境に入るが、資金面での困難が間近に迫っている。

（河田）

特集!!

続 BG (バイオガスプラント建設) 奮戦記!!

…ラスキ村より愛を込めて (ラスキ通信抜粋)

原 富男、宮腰吉郎、竹内高明

09.06.01 発酵槽ドームコンクリート打ち完了

ドームの場合のコンクリート打ちは、型枠に流し込めばよいというものではなく、硬く練ったコンクリートを乗せて叩かなければなりません。ドーム型枠の上にワイヤーメッシュという、ドームを強化する鉄筋の網を載せ、その上にコンクリートを打つのです。今日は昼飯が午後3時で、その時点で半分しか出来ておらず、最悪のパターン。2度打ちも脳裏をよぎりました。結局午後6時に無事終了しました。



09.06.05 排出槽天井コンクリート打ち完了

天井用の型枠はコンクリートの重量に耐え、かつバラしやすい事が求められます。学生2名にこの型枠の組み立てを頼みました。学生達は夜遅く完成まで、大きな体で狭い排出槽にもぐりこみ、頑張ってくれてありがたかったです。夜は学生差し入れのビールを飲みながら、バイオガスの話をしました。彼らは、卒論テーマをバイオガスにしたそうです。

今日はコンクリートが溢れないように枠を作り、ワイヤーメッシュを敷き、コンクリートを打ちました。学生はすごい馬力でコンクリートを投入してくれたので、午前中に排出槽天井のコンクリート打ちは終わりました。午後学生は帰り、竹内さんがキエフに帰り、入れ替わりに宮腰さんがキエフから戻ってきました。これで僕の主要な仕事はほぼ終了しました。

09.06.02 ドーム外側と排出槽内壁モルタル完了

朝から今にも降りだしそうな天気でしたが、せっかく労働者がきてくれるのに休んだら勿体無い、と仕事に出かけました。排出槽の内壁とドームの外側のモルタル塗りをしました。9時に始め、12時には雨が降り出し、一旦作業を中止しました。家に帰ったものの、ラーヤさんが食事を届けてくれるのが2時とのこと、お茶を飲んだだけで現場に戻りました。結局夕方5時にまた雨が降り出し、早仕舞いとなりました。ややこしい天気の下で、排出槽内壁とドーム外側のモルタル打ち、排出槽外側断熱材貼り付けがかなりできたので、良しとしましょう。

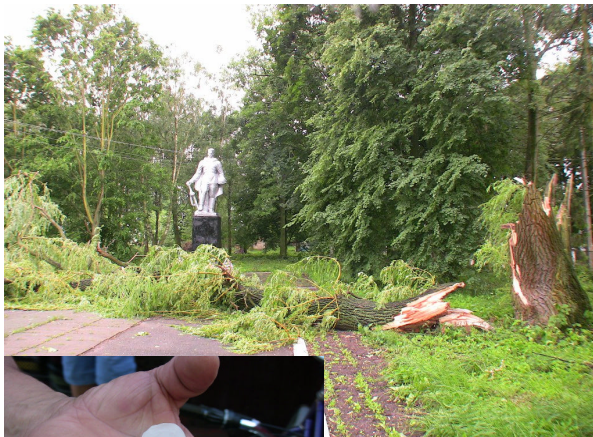
09.06.03 排出槽天井型枠作り始まる

明日、ディードフ氏が学生を連れ現場にきてくれます。僕の帰国後の残り作業などについて、打ち合わせる予定です。



09.06.07 雷雨、雹、強風、倒木 最悪の天候

朝小雨は残っていたものの 10 時頃には晴天となり、絶好の祝日になるかと思いましたが、午後 1 時頃雷雨となり、強風と 1 センチほどの雹も降り、めちゃくちゃでした。叩きつける雨でなすすべもなく、目の前 5 メートル先の 50~60 センチの大木が強風で倒れました。今度は近くの大枝が折れてきて、死ぬかと思いました。危ないと思って物置小屋に避難し、15 分ほどで嵐はおさまりましたが、全身びしょぬれになりました。家に戻り昼食を済ませた頃には、さっきの雷雨はどこへやら、現場に戻りました。すると今度は西側の雲が近づき、雨が落ち始めました。



09.06.09 現場を片付けました

ラスキでの僕の6月が終わります。残工事約一週間分を残してはいますが、日本からのバイオガス工事参加は本日をもって終了しました。ディードゥフ氏とドンチェヴァ氏が訪れ、今後の残工事について打ち合わせしました。ペロノーシコ氏に資材代を支払いました。明日は帰国です。残した工事があるので、後ろ髪引かれるのですが、一応これで区切りとします。応援、ありがとうございました。

090618 残工事返信 by 原 竹内 様

帰国後連絡もしないですみません。帰国後暫くは雲の上を歩くような頼りない感じがしたり、腹具合が悪かったりしていましたが、ようやく普通の生活に戻りつつあります。



090627 返信 by 原

宿題の水密検査について書きます。

①排出槽の床よりも 10 cm 上まで水を入れます。醗酵槽と排出槽は繋がっているの、これは醗酵槽の壁上部より上、ドーム側に水位が 10 cm 上がっていることと同じになります。

②約 120 cm ほどの棒を用意し、醗酵槽点検口の縁から水面までの寸法を図ります。2~3 日そのままにしておくコンクリートに吸われた分だけ水位が下がります。そこで水位を測ります。

③その後、7 日間置いて水位を測った時、②の水位と大差なければ水密に問題ないわけです。

④水位に大きな変化があれば、漏れがあることになるので、漏れの場所を探します。

原料投入に関しての僕の意見ですが、当面 100 日程は牛糞でいいと思います。



これからのチェル救を考える 09 チェル救合宿 in 名古屋 (09/07/11~12)

恒例の夏の合宿は、今年はディードゥフさん招聘講演会の都合もあり、名古屋市熱田区の「名古屋働く人の家」で行われました。午後の部、夕食をはさんで夜の部、翌日は運営委員会と続きました。今年のメインの話題は、なんとといっても「ナロジチ再生 菜の花プロジェクト」、そして「チェル救資金問題」についてです。もちろん、間近に迫ったディードゥフさんの講演会についても話し合いました。

<「ナロジチ再生 菜の花プロジェクト」の今後>

- A: プロジェクトを始めて2年半、5年計画のちょうど半ば。順調といえるだろうか?
- B: う〜ん、現地ではいろいろあって・・・国内的にも資金的に大ピンチだし・・・
- C: それでもナタネの実験栽培は、一年目の春・秋蒔き、二年目の春・秋蒔き、三年目の春蒔きと順調に進行している。BDF 装置は、設置・建屋改修といろいろ難問はあったけれど、昨夏、試運転までこぎつけられた。
- D: BG 装置のモデル建設は、今ラスキ村で完成に近づいている。これを当初の本格装置と捉え直せばいいのではないか。そうすれば資金的にも少し楽になる。
- E: しかし、BDF の製造過程で出てくる油粕など、バイオマスをこの装置に投入するとすると、問題とならないだろうか。わずかながらも放射性物質を含んでいると・・・
- F: それに関しては、現地側関係者と協議しなければならない。
- G: とにかく、「菜の花プロジェクト」のサイクルを完成させなくては。
- H: BG 装置の維持管理を頼める人を探したり、現地でバイオエネルギーに関心を持つ人を見つけたり、もっとナロジチ地区の人びとへの広報活動が必要だ。
- I: 日本国内でも、プロジェクトを応援してくれるサポーター募集に一層の努力をしなければ・・・

<チェル救資金問題>

- A: 現時点で今年度の予算を見ると、収入 1,308 万円、支出 1,555 万円、今年度末には 247 万円の赤字となる見込み。これにどう対処するか。
- B: まず増収を図るために、助成金申請をする。落ちたところにも再チャレンジする。
- C: 菜の花畑の「一坪キャンペーン」をやったらどうか (p9 参照)。
- D: 「菜の花プロジェクト」への理解を広げるために、いくつかの外部機関誌に投稿する。
- E: BDF の定常運転費の見直し (圧縮) をする。
- F: 支出を減らすために、現在の支援内容 (ミルクキャンペーン・ナロジチ地区病院への医療支援・被災者団体への医薬品支援) を縮小・選択するなど、支援を見直す。
- G: ゆう貯口座を明示し、募金の簡素化を図る。
- H: ホームページでクリック募金を募る。古本・お宝のネット販売に取り組んでみる。
- I: 友達から友達へと PR を広げてもらう (ペイフォワード方式)。
- J: 「ポレーシェ」の有料化 (p9 参照) に踏み切る (賛助会費・年間購読料として)。
「考えると夜も眠れない・・・」「出稼ぎにでも行かなければ・・・」 私たちも一生懸命知恵を絞っていますが、読者の皆さんも、ぜひよいアイデアをお寄せください !! (戸村)

緊急!! 資金サポーター 年会費 3,000 円/人(ポレーシェ購読料を含む)大募集!!

2007 年から始めた5 年計画「チェルノブイリ・ナロジチ再生・菜の花プロジェクト」が、今まさに、汚染地地域再生に係わる、3 つの画期的な「仕掛け」を整えようとしています。

「菜の花栽培による土壌浄化の分析」「汚染されていない菜種油によるバイオディーゼル油製造」「菜種のバイオマスによるバイオガスの製造」という、3 点セットです。2008 年に、ウクライナ事情により起きた大きな番狂わせ（BDF 製造装置設置許認可等の遅れにより、BG 製造プラントの着工延期、そのための助成金返還）というダメージを受けながらも、それを教訓としつつ、ひとつひとつ目的に向け、事業を進めています。ところが、今、大きな壁にぶつかっています。資金不足という大きな壁です。

今年 4 月から 6 月までのご寄附は 1080,309 円。特に 6 月はポレーシェ紙上で「サポーター募集！」記事を掲載したこともあってか、633,800 円ものご寄附を寄せていただきましたが、今年度末までの予測はかなり厳しいものがあります。このまま行けば、2009 年度事業計画実行には、400 万円強（現時点では、250 万円）の赤字になってしまいます。「自立支援」を目指し、これから現地のために役立てようというその時に、ストップをかけなければならないのでしょうか？…否！否！そんなことはできません。

運営に係わる私達は、経費削減と資金の有効利用に極力努力しますが、ご支援くださる皆様にも、一層のご理解とご協力をお願いします。

具体的には「菜の花畑一坪キャンペーン（3,000 円/口であなたも一坪オーナーに!!）」、そして「サポーター（賛助）会員制…年会費 3,000 円/人（ポレーシェの購読料を含む）」の導入です。

5 年計画の事業を完遂し、菜の花プロジェクトの成果をレポートにまとめて世界に発表する際には、この事業の共同推進者（サポーター）としてお名前（もちろん希望者のみですが）を掲載したいと考えています。どうか、熱きご支援を！
(運営委員一同)

外務省「NGO 長期スタディ・プログラム」に応募

…ウクライナでの約6ヶ月間の研修が内定しました…（戸村 京子）

このプログラムは、「国際協力に携わる NGO の能力強化」「国際協力分野での NGO の人材育成」「所属団体と受け入れ機関の相互理解・交流の促進とネットワークの拡大強化」を目的とするものです。海外の NGO・国際機関等で実務の一部を担いながら、約 6 ヶ月間の実務研修をします。チェルノブイリ救援・中部のスタッフの一員として派遣されることになるので、個人面接の他に団体の面接もあり、プログラム運営委託先の（特活）国際協力 NGO センター（JANIC）より事務所訪問を受け、東京での個人面接を経て 7/17 に内定の通知をいただきました。現在、スタッフの方のサポートを受けながら準備へと進めています。

このプログラムは、所属する団体や研修者のニーズにより、主体的に研修先と研修テーマを設定することが特徴です。私は研修先として、第 1 希望に UNDP（国連開発計画）のウクライナ事務所 CRDP（Chernobyl Recovery and Development Program—チェルノブイリ事故の再生・開発を担当）を考えています（第 2 希望は被災者団体ゼムリヤキ；第 3 希望はユニセフウクライナ）。受け入れのお願いは、これから始めることになります。

研修内容は、UNDP/CRDP の活動のなかで、チェルノブイリ被災地の再生・開発プログラムの実施方法、住民参加型の地域開発の手法などを学ぶことを考えています。「ナロジチ再生 菜の花プロジェクト」の実用化に向けて、住民参加型の手法を学び、これからの支援活動でのヒントを得たいと思っています。



<右端がディーマ君(ラスキ村の工事現場にて)>

ウクライナにおける

バイオガス装置プロジェクト発展の可能性

ドムイトロ・オスタブチュク(注:愛称ディーマ君)

(注)ディーマ君紹介

准教授ディードッフ氏の指導の下、生態学部で研究中のディーマ君は優秀な学生で、授業料免除の特待生。建設現場でのアルバイト経験も豊富で、バイオガス装置建設現場では、汚れ仕事も厭わずに率先してやってくれ、また随時適切なアドバイスもしてくれた。今後、チェルヌのバイオガス製造装置を使って、ガス組成などの研究を担当する予定。

エネルギー資源自給開発の戦略は、どんな先進国においても、まず自国の戦略的基盤の創設から始まるものだが、その一部として必須なのは、地域のオルタナティブなエネルギー源を利用し、エコロジ的にも問題のない、「熱・電気生産体制」である。バイオエネルギーの利用は、エネルギー源をほとんど完全にロシアに依存しているウクライナの国家安全保障にとって、重要な課題である。バイオガス製造装置は、この緊急な要請を満たすためのオルタナティブなエネルギー源の利用の好例といえる。

この問題は3つの側面を持っている。エネルギー供給の側面・経済的側面・エコロジーの側面である。

エネルギー供給の側面から始めよう。ウクライナの農業の発展にとって優先的な課題は、中小規模の農場の創設であり、そのような農場のエネルギー資源供給は焦眉の問題である。ガス供給の方策の一つとして考えられるのは、中小規模のバイオガス製造装置だ。ちなみに、ウクライナでは、約200万人がガスの引かれていない村で生活している。

経済的側面とは、バイオガスの価格が天然ガスの価格よりも数段安いということであり、これはグローバルな経済危機と、一般的なエネルギー源である天然資源に対する需要と価格の低下を考慮に入れてのことである。天然資源の埋蔵量は増大するわけではなく、その価格は遅かれ早かれ、埋蔵量の減少の程度よりずっと急激に高騰するだろう。

エコロジーの側面とは、畜産廃棄物による環境の汚染である。家畜のし尿や、その分解物が農村部の大気・土壌・水を汚染しているのだが、それら動物起源の廃棄物を加工し利用することができるのである。家畜を飼育している農場の周辺では、汚染された地域が広がっている。特に危険なのは、土壌にしみ込んで地下水脈を汚染する可能性のある液状廃棄物である。畜産廃棄物の生物学的処理法として最も将来性があり効果的なのは、メタン発酵法である。バイオガス製造装置稼働の基礎となっているのは、この原理なのである。

上記のことすべてを踏まえれば、バイオガス製造装置には大きな将来性があり、その導入に際して複合的なアプローチを採用すれば、すばらしい成果を上げることが可能であると言える。

筆者はまた、日本の方々とともに働いて得た印象についても言及しておきたい。

まず何よりも、彼らの勤勉さ・几帳面さ・計画性・時間の厳守といった性格を指摘したい。我々に対する暖かい接し方にも、注意を引かれずにはいられない。ご一緒に仕事をしたのはごく短い期間ではあったが、原さん・竹内さん・宮腰さんが我々に残したものは、本当に好ましい印象と思えばかりであった。彼らと知り合えたのはとてもうれしいことだった。我々はみな、ガスの発生時にまた彼らと会えることを期待している。

竹内さんのウクライナ便り

私はこの間もキエフとラスキ村の間を行き来して、バイオガス製造装置の建造工事を継続していたのですが、あわただしく仕事をしているうち、気がつくといとんとと気温が上がっており、7月半ばからは日中の気温が 30℃を超える日が続き、週末の午後などは、アスファルトの焼け付く戸外で人影がまばらな状態です。日本の一般の道路に比べれば歩道が格段に広く、そこに街路樹がたっぷりと葉を広げていて、日陰もそれなりにあるのです。

公共交通機関(バス・トロリーバス・路面電車・地下鉄)には、いずれも冷房はなく、ふつうの住宅でもクーラーをつけている家はほとんどありません。バスの中で扇を広げているご婦人も見かけたことがあります。冷房の必要を感じるような暑さが、従来ほとんどなかったということでもあるのですが、ここ数年、地球温暖化の影響なのかどうか、夏場やたらに暑い日が多いと感じるのも事実です。成人男子でも、アイスクリームを片手に外を歩いている人があり、それは別に恥ずかしいとされることではありません。

ドニプロ河(はウクライナ語表記で、ロシア語表記ならドニエプル河)の川中島の公園では、ビールや焼肉の屋台が並び、岸辺に水着姿の人々が目立ち、泳いだり寝そべって日焼けしたりと、夏の盛りを楽しんでいます。流れの緩いこの河の水は、どう見てもきれいとはいえないのですが。作風が当時の体制のお眼鏡に合わず、若くして粛清された V.ピドモグリヌイの小説『都会』(1928年)を読んでいると、田舎から大学受験のためキエフに出てきた主人公の青年が、ドニプロの河岸の人気のない場所を探して泳ぐ場面があり、街中でも自然に触れる喜びの機会を逃さず味わうという人々の志向は昔も今も変わらないのかと思います。お金とヒマのある人たちは、クリミア半島やブルガリア、トルコ、エジプトなどの海辺で夏休みを過ごしたりするわけですが、そういう楽しみは庶民には到底手の届かないものです。

この間、首相の支持母体である「ティモシェン



コ・ブロック」と野党第一党の「地域党」の連立が、ほぼ現実化しようとした土壇場でくつがえされるということがありましたが、そういう裏取引の話以外、引き続き不況にもかかわらず、政治・経済の面で目立った改革は相変わらず行われなままです。

そんな折しも、「ティモシェンコ・ブロック」所属(かつては「地域党」所属だった)の議員 L 氏が、地区検察の検事及び警察署長と一緒に、自宅のあるキロヴォグラード州の森で一市民を銃殺するという事件があり、最高議会在彼の不可侵権を剥奪するという決議をした時には、彼はすでに行方をくらましていて、未だに発見されていません。これは「人間狩り」のお遊びの結果であった、という説も雑誌で活字になっています。法で裁かれそうになった有力者が、国外に逃亡して責任を逃れるというケースは、遺憾なことながら、ウクライナでは珍しいことではありません。もっとも、独立後の 10 年くらいはそういうケースもあまりなく、つまり責任を問われる前に事件が揉み消され、犯人は何食わぬ顔でそのまま高い地位に居座っていたのではないかと疑われる節がないでもありません。

2000 年、当時のクチマ大統領をネット上のメディアで批判していた記者が、首なし死体で見つかった事件については、直接の下手人とされる警察官らがすでに実刑判決を受けていますが、彼らに直接暗殺の指令を出したとされる当時の内務省刑事部長は、2003 年秋から行方不明のままです。もっとも、この人の場合、彼の上からさらに指令を下した人物に「消された」可能性もあるのではないかと思います。 (7月19日)

事務局便り

チェル救の活動を始めて 19 年。よくもここまでこの活動を続けてくることができたと思う。数え切れないほどの多くの方々が、物心両面で支えてくださったおかげだ。どんなに厳しい局面に遭遇しても、それを打開する「人や知恵、そして資金」に恵まれ、この活動を続行することができた。これを私達は「チェル救の奇跡！」と呼んだ。さて、今、チェル救に訪れている試練は、「資金不足の打開」・・・である。ナロジチの人々に「希望を！」と始めた「菜の花プロジェクト」は、これからその成果を出す時を迎えんとしている。が、今、その資金が足りない。ミルクカンパ・被災者（事故処理作業員）医療支援・ナロジチ病院支援を削るか？ 否、それはできない。この厳しい時代・経済状況の中でのご寄付がどんなに大変なものかは、承知の上、今ひとつのご支援をお願いしたい。「少しずつ」をたくさんの方々に広げ、支えていただけないだろうか。私達も精一杯の努力をすることを約束する。（山盛）

～次世代の NGO を育てるコミュニティ・カレッジ 2009(通称:N たま)の参加者募集中～

N たまは、次世代の NGO を担う人々が、「地域の NGO での実践(インターンシップ・事務局体験)・「理論(講座)・「フィールドワーク(国内・海外)」を通じて、自らが NGO 活動を創造するために必要な視点・知識・技術の体得、ネットワークを築いていきます。

チェル救では、毎年 1～2 人の研修生を迎え、“クリスマスカードキャンペーン” や “ミルクキャンペーン” を担当してもらいます。私自身、“やりたいこと”を発見できた研修でした。

興味がある方は、下記に問い合わせてください。

(山本)

特定非営利活動法人 名古屋 NGO センター TEL:052-483-6800

E-mail: info@nangoc.org HP: http://www.nangoc.org

●好評発売中!!

ガイガーカウンター「RADEX RD1503」(¥30,000/台・限定 5 個)

ロシアのカルテックス社製の β γ 放射線測定器。ポケットにも収まる手のひらサイズ、単四電池 2 本で動作、40 秒程度で計測可能（表示はロシア語表示ですが、簡単な操作で測定可能です）。



編集後記

☆暑い日本の夏によろこそディードゥフさん。講演内容は硬い！難しい!! かも。でも私はきっとディードゥフさんがお茶目だと予想している。なんせチェル救の面々と理解しあえる人なのだから。（佳）
☆どんな仕事でも、生涯現役でやり続ける人はすばらしい！ 意欲を持続させることが、生きる力か。生涯現役の NGO ボランティアめざして、自身を鼓舞するだけでなく、励ましあうのがいいな。（と）
☆新型インフルエンザの予防対策のため、手洗いとうがいを励行。おかげで今年は食中毒が激減したとの事。健康でいたいのなら、いつも手洗い・うがいを習慣にすれば良いということです、はい。（美）
☆大型地方選挙 5 連敗をうけて、麻生首相は、1 年間先延ばししつづけてきた国会解散・総選挙をようやく決断した。ここに至るまでの与党の混乱ぶりには、目をおおいたくなるものがあるが、実はこの間、水面下では「アメリカの圧力に屈した売国奴」VS「アメリカからの独立を目指す愛国者」の闘いが繰り広げられてきたのである。日本の歴史上、初めて一般国民を主役とする政府が誕生するのかどうか、それは私達一人一人の一票にかかっている。8 月 30 日は、万難を排して選挙に行こう！投票率が上がれば、絶対に日本は変わる！（J）

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷「エープリント」

TEL・FAX (052) 871-9473